

DATA FILE



斜方晶系

名前	STIBNITE (スティブナイト) / 輝安鉱
化学組成	Sb_2S_3
色	鉛灰色～鋼灰色
光沢	金属光沢
蛍光	なし
条痕	鉛灰色～鋼灰色
劈開	完全
断面	亜貝殻状
硬度	2
比重	4.6

輝安鉱 STIBNITE

金属元素アンチモンの主要な原料で、「アンチモン」を意味するラテン語の「スチビウム」から「スティブナイト」という鉱物名がつけられた。そのほか、「アンチモナイト」、「アンチモ・グランス」と呼ばれることもある。

採掘されたばかりのものは、金属光沢を持っているが、長時間、光にさらされると、つやがなくなり黒色に変化する。

イタリアで産出した柱状結晶の輝安鉱。

熱に弱く、塩酸に溶ける性質がある。

熱水鉱脈中や、石灰岩が熱水によって交代された鉱床の中で、石英や自然金、自然砒、辰砂、方鉛鉱、閃亜鉛鉱、雄黄、黄鉄鉱、鶏冠石などといっしょに生成する。

劈開は完全で、ハンマーでたたくと貝殻状に近い断面があらわれ、素焼きの陶板にこすりつけると、鉛灰色～鋼灰色の条痕が残る。

輝安鉱

アンチモンの主要鉱石

金属元素アンチモンの代表的な鉱石である輝安鉱。工業用のアンチモンを取り出すためには、まず焼くことによって硫化アンチモンを酸化アンチモンに変え、さらにコークスを使って純粋な金属に還元する。これらは、鉛蓄電池の鉛合金、軸受け合金、活字用合金、ハンダ合金に加工されるほか、純度の高いものは半導体やレーザー用の合金に使用される。また、アンチモンの化合物は、耐火物質、塗料、セラミックス、エナメル、ガラスの染料などに広く利用されている。



針状結晶の輝安鉱。
イタリア産。



方解石の中に生成した輝安鉱。

輝安鉱の集合体。
イタリア産。



世界的に有名な日本産

日本で採掘された輝安鉱は、質がよいことで知られ、世界各地の博物館に展示されている。最も有名なものが、明治時代初期に愛媛県の市ノ川鉱山で採掘された長さ60cm、重さ7kgの結晶。また、兵庫県朝来市（旧生野町）にある生野銀山の生野鉱物館では、日本の鉱物学の基礎を築いた和田維四郎（1856～1920年）が集めた輝安鉱のコレクションを見ることができる。

柱状結晶の集合体。



主な産地

